

(月1回程度、不定期掲載)

障害論と支援論

佐藤幹夫

第1回 「動的平衡」と支援

1. 「障害者」「ホームレス」、言葉と配慮性の問題

東京・山谷地区を中心に活動する特定非営利法人「自立支援センターふるさとの会」から声をかけていただいたのは、2008年の暮れごろだったと思う。社会的貧困、格差社会、派遣切りなどがさかんに言われ、東京・秋葉原での連続殺傷事件がおこった後だった。そのとき、二つの話題が私を動かした。

一つは、ホームレス支援という枠で、メンタルケアをしていきたいと話していたこと。もう一つは、「ケアをする人へのケア」の重要性を訴えていたこと。相談室を開設し、この二つの新しい取り組みを始めたいので手伝ってもらえないか、というのがそのときの依頼の趣旨だったと記憶する。

少し迷ったが、その場で承諾した。

私は、2001年に教員を辞して後、細々と、もの書きを生業として生活を営んできた。ホームグラウンドは「発達障害」である。発達障害と一言でいっても内容は多岐に渡り、特別支援教育の現状について、精神科医療のありかた、卒後の生活支援と福祉をめぐる、法を犯す障害者たちと司法、司法精神医学の諸問題など広範な領域に及び、すでにこれらの問題にどっぷりとかかわっていた。加えて、高齢者の医療・介護、認知症という課題にも深入りし始めていた。

「自立支援センターふるさとの会」は、10年ほど前から山谷地区を拠点として、ホームレスの人びとの支援をおこなってきたNPO法人で、現在は広く、台東区、墨田区、新宿区を中心として先駆的な事業を展開している。ホームレス支援の根幹である住居保障や生活保護関係について私はまったくのシロウトであり、よく知らぬままに首を突っ込むことに自重する気持ちが強かった。しかし既述した二つの話題に動かされ、結局、受諾させてもらうこととなった。

以下はその理由であるが、少し回り道をすることになる。

言葉に対するちょっとしたこだわりが、私にはある。たとえば、何のためらいもなしに「障害者、障害者」と連発されると、ちょっとなあ、と引いてしまう。たしかに「障害」は彼の小さくない属性である。しかし全体ではない。ましてや彼の人格でもない。あくまでも彼の一部である。しかし「障害者」という言葉には、あたかもそれが彼のすべてであるかのようなニュアンスが貼り着いている。100%、どこからどう見ても、1日24時間1年365日、障害である。——無雑作な連発から、そのような発話者の人間観が、私には感じられてしまうのである。

もうひとつ、こんな例もある。「精神病院」という言葉が最近使われなくなっていることをご存じだろうか。代わりに「精神科病院」と記載されるようになっている。「精神病院」

という言葉には、これまでの多くのネガティブな歴史がつきまとっていることは、同意していただけるだろうと思う。しかし昨今、病院施設のありようも、精神科医療の内実も、10年前とは比べられないほど開かれており、かつてのイメージを払拭したい、という動機がそこには含まれているのだろうと推測される。

「ふるさとの会」とかかわるようになった当初、同じように、「ホームレス」という言葉が無自覚に濫発されるようなときに、ちょっとした違和感を覚えた。なぜか、はっきりとした理由は分からない。私自身が口にするときには、少し遠慮勝ちになっていた。

どうして、「ホームレス」という言葉を使いにくい、と私は感じるのだろうか。路上や公園、空き地でテント生活している人たちを「ホームレス」と呼ぶことに、何の問題があるのだろうか。そこまで考える必要もないのではないか。そのような疑問をもつ方もいるだろうと思う。当然である。

わざとらしい「善意」は何よりも醜悪だし、おかしな言い換えは本質を隠ぺいする、矛盾を見えにくくする。そうした見解が正論であることを、私は一定程度は認めるものだ。そのことを認めたくて、できればあまり使わないで済ませたい言葉のリストのなかに、ホームレスという言葉もおさまり、以来、それは続いているのである。

といって、ある特定の言葉は「差別語」だから、使ってはいけないというような、いわゆる「言葉狩り」に類したことを主張したいのではない。これは、私にとってはできれば避けたい言葉だという、あくまでも、個人的な居心地の悪さの表明である。

言い換えが、新たな居心地の悪さを再生産することもある。

たとえば、昨今しきりと目にする「障がい」「障がい者」という言葉を使う趣味は、私にはない。「害」という字がよろしくないから「障がい」とする、という理由で（たぶん）行政用語となり、そのまま一般にも広まったようであるが、では「障」の字はよいのか。へそ曲りの私は、ついそう考えてしまうのである。

「障」は「月の障り」といった用法があるように、いい意味でばかり使われているわけではない（さまたげ、さしつかえ、病気になる、といった意味があると辞書に記載されている）。「害」の字が、当事者を貶めるイメージがあつてよろしくないというのなら、「障」も同様によろしくないはずだ、というのが、筋の通った主張というものだろうと私には思われるのである。

それなら、と考えたのだろう。「しょうがい」とすべて平仮名にして記述する例も、ごくわずかではあるが見かけることがある。しかし「しょうがい者」という記載はいかがなものだろうか。

かつて「ちほう症」や「精神ぶんれつ病」としていた例も見たことがあるが、そうやって平仮名にして済ませておこうとするのも、また、私の趣味ではない。というか私の感度では、逆に、これではご本人をバカにしているんじゃないか、と感じてしまうのである。

ではどうするか。特に私自身に有効な手はない。知人の児童精神科医は「障碍」と書くことを常としているが、これはこれで一つの見識であつて違和感はないが、私自身は「障害」のままである。本稿がそうであるように、せめて「 」でくくって表記することにしてはいるが、これもケースバイケースである。

整理してみよう。

かねてより、「障害者」という言葉が、あたかも当然のごとくくり返される場面に出くわすと、違和感を覚えた。同様に、「ホームレス」という言葉も節度をもって使った方がよくはないかと、私のセンサーは働いた。これがなぜだったのか。

まず、かつての言葉狩りのように、言葉の一律規制を強制する主張には、私は反対する。しかしながら個々人の判断で、節度をもちたい、場合によっては控えたい、とすることには反対しない。これは基本原則である。

では、無自覚に濫用濫発されると違和感を覚える言葉を、平仮名で表記すれば違和感は解決するののかといえ、必ずしもそうではない。「障がい」も「しょう害」も「しょうがい」も、私の鈍い感度にあってさえ、ご本人をバカにしたような、こんな日本語は使いたくはないというセンサーが働くのである。繰り返すが、これは私自身の個人的な自戒である。

では、「ホームレス」という語になぜ抵抗を覚えるのか。そんなちょっとした問題が、「ふるさとの会」に出入りさせてもらうようになって、最初の宿題となった。

さて、何を私はこだわっているのだろうか。

2. 「自立支援センターふるさとの会」の事例検討会から

ここで、ふるさとの会の話題に戻る。

最初にお会いしたときに「ホームレスの人々のメンタルケアという取り組みは、あるいは初めてのことでないか、少なくともほとんど耳にしたことはない」と水田恵代表はくり返していた。一般的には、居住の確保と地域生活への以降支援、就労支援、生活保護の受給の支援、医療や介護サービスへのつなぎ、などが、過半の支援団体にあっては基本的な取り組みであるという。

こうしたはなしを聞きながら、私なりに、いくつか類推できることがあった。

メンタルケアという言葉が具体的にどんなことを指すのかは分からなかったが、それぞれの方々は、路上での生活に至るまで、あるいはその後も、想像を絶する人生を歩んできているはずである。その彼らに、踏み込んだケアをしようすることは、かなり困難な取り組みになるだろうことは、まず想像できた。

だからこそ、ケアをしている人たちへのケアが重要になってくる。

「ケアをする人のケア」については、私自身もこれから重要な課題になってくると考え始めていた。医師や看護職のバーンアウト、小中学校教員の病気休職者の増加（多くがメンタル面の問題）、過重労働による介護職の人員不足などの出来事が、すでに顕在化していた。ひとを援助する職域で、何か、これまでとは異なる事態が生じている。早急に手を打たないと、取り返しのつかないことになる。——機会があるごとに、私自身もそんな考えを発表し始めていた。

「事例検討会」は、月に1回が定例である。回を重ねて出席していくうちに、なぜこうした会の開催が必要だったか、保健師で相談室の責任者である的場由木さんや水田代表の意図が、ぼんやりとではあるが輪郭を描くようになった。

これまで事例検討会議で取り上げられたテーマを並べてみる。

- 生活再建相談センターから社会資源移行にあたっての支援の在り方
- 路上から自立援助ホームへ
- 自死に至った利用者
- 簡易宿泊所における居住と生活支援
- 自立援助ホーム利用者への支援
- 認知症利用者のケア
- 死亡事例
- その他。

2011年11月の段階ですでに34回を数えるが、こうしたテーマに沿って、個別の事例が取り上げられる。集められる限りの生活史状況、現在に至るまでの病歴やどんな社会資源を利用してきたか。いまの施設での様子や人間関係、健康状態などが担当スタッフから情報として提示され、確認しながら問題点が絞り込まれていく。

「ふるさとの会」の発足からその後の歩みについては、拙著『人はなぜひとを「ケア」するのか』（岩波書店）にも記しているが、ひと言で言えば、利用者のニーズに応じるように、制度と制度の間隙を埋めていく取り組みを続けてきたと言ってよいと思う。

そして事例検討会議で取り上げられるのは、困難ケースであり、職員にとっても利用者にとっても重要ケースであり、新たな課題の典型的なケースという側面ももっている。

これまでの話し合いで出された内容から、重要な課題を、次のようにまとめてみる。

①山谷地区全体が高齢化していることに伴う問題群。

- ・認知症やさまざまな疾患、障害の重篤化に対し、どんな法人独自の対人援助論をつくるか。共通了解されるか。
- ・QOLの低下に伴う生活支援の在り方。訪問介護や看護サービスの隙間にある生活支援。
- ・終末期と看取りの問題。従来型のホスピスとはことなり、それまでの生活居住の場での看取りが可能か。

対人援助論の構築。生活支援の制度化にたいする政策提言。終末期への取り組み。まず大きくこの3点が、取り組みに柱になっていると思われた。

②さらに「生活の貧困」を如実に示すことによってあらわれてくる問題群。

- ・居住の支援が結果的にそれまでの人間関係を断ち切り、孤立を招いてしまうこと。
- ・「孤独死」と、その兆候の見つけにくさ。結果として発見の遅れ。
- ・自死してしまう人がときに現われること。やはりここでも兆候の見つけにくさと、不意をつかれてしまうという課題がある。
- ・幼少時の虐待やいじめなど、厳しい生育歴に起因する問題群。

ここでいう「生活の貧困」は、経済的困窮だけを意味しない。自身の生活圏において、生きていくために必要な最低限の人間関係をもたず、またみずからの手で作っていくことも難しい。精神疾患や知的・発達障害、身体障害をもつなど、何らかの資質的なリスクフ

アクターを抱えている。そして人間関係や生活上のトラブルを解決する力が弱い。

いわば経済困窮、人間関係の孤立と地域での孤立、さまざまな要因による問題解決の弱さ。これらが複合的に現われてくる事態を「生活の貧困」と呼びたいと思う。

③そして利用者のなかに少しずつ増えつつある若年層が示す問題群。

- ・就労の支援と就労先の確保。
- ・刑事施設から社会復帰した後に遭遇する、さまざまな生活上の困難。

若年層をどう支援するか、より具体的な取り組みは今後の課題であるが、方向は二つある、と私は受け取ってきた。

ひとつは、働くにあたっての基本的スキルが獲得されておらず、環境の整備や作業工程の分かりやすい提示など、就労の技術そのものを丁寧に伝達することが必要なタイプへの支援。知的なハンディキャップをもつ。あるいは養育環境の不遇のため、そだちのなかで身につけてくるべきスキルをもつことができなかつたタイプといつてよい。

もう一つは、学習面にしろ社会的なものにしろ、一定程度のスキルはもっているが、生活が不規則になって遅刻や欠勤が増える、約束が守れない、金銭管理に問題がある、人間関係がうまく築けない、極度に自分に自信がないが、逆に不釣り合いなほどのプライドの強さを誇示するなど、いわゆる発達障害タイプの人への支援の方向である。支援者にとっては人間関係ができたと思っていると、じつはそうではなかつた、肝心のところでドタキャンされてしまった、ということくりかえしながら、自分自身を追い詰めてしまう。そういうタイプである。激しい虐待と体験している人もいる。

どちらかにきれいに分けられる、というタイプは少数派であろうが、若年層への支援にあたっては、大きくはこの二つの目安をもっておくことは重要な視点ではないかと思う。そして言うまでもなく、多くのひとが複数の課題を抱え、それぞれが複雑な絡み合い方をしており、まさに各人各様に異なる。

現場の担当者の報告を受けながら、こうしたさまざまな問題群を腑わけしつつ、共通了解しておかなくてはならない支援の方向、配慮すべき点などをさぐっていく。このとき、私が蒙を開かれたことは、「事例検討会議」とは、単なる症例会議に留まらない内容をもつことであつた。

私は制度的な問題についてはシロウトであり、療育的・心理的な見解を示すことが関の山である。一方、ふるさとの会の側からは、どの制度をどううまく組み合わせればより適切な支援になるか、という制度活用の提示に留まらず、ときには、その人のもつ課題から新たな事業展開のスキームが導き出され、その実現に向けたプレゼンテーション、といった趣を呈することもあつた。

くり返すけれども、事例検討会議においては、ケースとして取り上げられた人がどんな状態で、どのようなケアが必要か、予後はどう予想されるか、といったいわゆる症例会議に留まるものではない。また、どんな制度をどう当てはめていけば事業として利益の大きい展開ができるか、といったテーマを中心とした、いわゆる経営会議でもない。そのどち

らでもあるし、現場のスタッフにとってのメンテナンスという性格もあわせもち、これらがランダムに機能しながら進められていくのである。

このような事例検討会議に参加しながら、当初、なぜ「ホームレス」という言葉にちょっとした抵抗感を覚えたか、少しずつ見えてきた。それは、これまで福祉や教育、介護という領域に関わりながら、私自身が何を主題としてきたか、改めて気づかされることでもあった。

3. ホームレス支援と「動的平衡」

かつて（私が教員として某養護学校に赴任した30年ほど前、としてもよいが）、「障害者福祉」も、「障害児教育」も、「障害者支援」さえも、その言葉は手垢にまみれていると感じられた。「障害者」や「障害児」という言葉は、もっと手垢まみれだった。

このように断じる根拠は、経験的なものでしかない。15歳までの間の10年間、「障害児」を家族とし、ともに過ごし、そこで見聞きした体験によっているが、この文字を目にし、言葉を耳にするたびに、本人や、私たち家族がどのような社会的なまなざしのもとに置かれているのかが、否が応でも理解された。

小学生ながら、それらの言葉がとても貧しい内容しか持たないことが、不当に思えてならなかった。そして何よりも、言葉の背後にべったりとくっ付いている、哀れみや施しの感情ほど不快なものはない。そんななかに置かれながら生きるくらいならば、排斥されたほうがよほどまだ、などと感じていたから、私の素直ではない性格は、そのころから片鱗を見せていたようである。

さらに10数年が過ぎ、私はなぜか「障害児教育」の教員として、「知的障害児」と呼ばれる子どもたちの前に立つことになるが、それは、皮肉としか言いようがない。ところが、「障害児教育」も「知的障害」も、言葉自体の貧しさは相変わらずだったにもかかわらず、内実は、予想をはるかに超えたダイナミズム溢れるものを作り出そうとしていた。

そこで得た最大の収穫は、ひとつ。教育の実践とは（あるいはひとを援助する仕事とは）、その内容を更新し続けることを止めてはならない、というメッセージだったと思う。作り上げては更新し、また作っては新たなものを求め、と繰り返されるそのプロセス。それをやめてしまえば、言葉はすぐにスローガンと化す。「ふるさとの会」の事例検討会議が思い起こさせてくれたものも、まさにこのダイナミズムだった。

事例検討会で得た「ふるさとの会」の特徴を、もう一度確認してみる。

サービス提供者側の都合（制度や習慣など）を前面に押し出し、障害当事者をそこに当てはめていき、当てはまらないケースは受け付けない（あるいは切り捨てる）。——こうした従来型福祉にありがちな発想は、「ふるさとの会」では採らない。そうした姿勢こそ拒否する。そのことがまずは痛感された。「利用者一人ひとりに即した支援」とはよく耳にする

言葉ではあるが、お題目ではなく、その実現を図ろうとするシステムの一つが事例検討会議であった。

言い換えるなら、一度設定された支援の内容はたえず更新されていく。目標は設けられるが、それは絶対的なゴールではない。確認された現状はあくまでも現状であり、むしろ、もっと良い支援ができるのではないか、もっと良い仕組みが作れるのではないかと、試行錯誤するそのプロセスが最大の特徴であり、そこが私が強く共感するところだった。

支援とはなにかと問われたら、むしろ検討を重ねるプロセスそのもののなかに重要な鍵がある。いまの私はそう答える。

支援は動く。日々、更新されるのである。

ちなみに、『動的平衡』（木楽舎）の著者・福岡伸一氏は次のように書いている。

《新たなタンパク質の合成がある一方で、細胞は自分自身のタンパク質を常に分解して捨て去っている。なぜ合成と分解を同時に行っているのか？ この問いはある意味で愚問である。なぜなら、合成と分解との動的な平衡状態が「生きている」ということであり、生命とはそのバランスの上に成り立つ「効果」であるからだ。

合成と分解との平衡状態を保つことによってのみ、生命は環境に適応するよう自分自身の状態を調節することができる。これはまさに「生きている」ということと同義である。》
p 75

ここに書かれている生命の平衡状態が、支援の最も本質的なポイントではないか。繰り返すが、支援とは、日々なされる更新であり、更新される限りにおいて支援としての生命を保つ。人と人とのあいだでなされる、ある動的な営みなのである。

福岡氏は、さらに次のように書く。

《サステイナブル（持続可能性）とは、常に動的な状態のことである。》

支援が持続可能であるためには、「動的」でなければならない。作り上げては、もう一度作り上げ、という絶えざる更新のその過程こそが、「持続可能性」である。

ここにたって、「言葉に手垢がまみれている」という私の実感が、なにに向けられたものだったのか、いくらかなりとも明らかになったのではないかと思う。

「障害者」も「障害」も、その内実が「動的な平衡」を失ったとき、手垢にまみれた言葉になる。支援とは、たえず更新されるものだと述べたように、「障害観」も更新される（どう更新されるかは、拙著『ルポ青年期の発達障害とどう向き合うか』（PHP）において、その概要をスケッチしているので、ここでは述べない。ぜひそちらを参照していただきたい）。

私自身は、山谷地区に足を運ぶようになって、まだ三年ほどしかたっていない新参者にすぎない。それでも、少なくないNPOやその他の支援団体が、新たな仕組みづくりの必要性を訴える場面に出くわしてきた。

したがってこのあたりの事情は、「ホームレス」あるいは「ホームレス支援」という言葉にあっても、同様なのではないか、というのが、本稿一編に託した主題である。